
きっとその瞬間に

明日ナロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいつとの瞬間に

【Zマーク】

N4067N

【作者名】

明日ナロ

【あらすじ】

なんだか知らないけど私異世界にきちゃいました！

そしてなんだか知らないけど話進んじゃってません？私抜きで！ふざけんなっ！

平凡な彼女が周囲の人々に影響を「えながらゆづく」と進む異世界物語。

けつこう主人公溺愛されますが性格はドライ？

プロローグ

私は、じく普通の

一般家庭に生まれた。

父、母、兄が一人に私の五人家族である。

父、篠崎 賢之助は、まだまだ現役のサラリーマンだ。ちなみに部長。

母、篠崎 桃子は、専業主婦。

そして、社会人の上の兄に

大学四年の下の兄。

最後に今年大学生になつたばかりの私、

篠崎 透である。

あ。ちなみに

上の兄は篠崎 修斗

下の兄は篠崎 郁斗といつ

と。

ここまで

何処にでもいるよつた普通の家族だ。

しかしながら

うちの家族は一つだけ

異常な点が存在するのだ。

そう、まさに異常。

何が異常かといつと

それは、家族全員（私を除く）が大変見目麗しい顔をしていらっしゃるということ。

父、賢之助は

常に危険な色気がただよい眼鏡が最高に似合つ美人さん。

母、桃子は

グラマーなボディに

口リロリな顔という危険な組み合わせの美女。

上の兄、修斗は

父の遺伝子を

色濃く引き継いだ美形。

下の兄、郁斗は

今どきの爽やか系イケメン。

そして、

どこのを間違つたのかふつーの顔で生まれてきた私。

きっと、これからずっと平凡な顔で美しい家族に振り回されつつも、
平凡な毎日を過ぐすものだと思つていた。

あの時、

あんなことが起るんですね。
まだ。

その日は朝からなにも変わったことのないふつーの一 日だった。

朝6時に起床し、朝食を作り、超絶美形のつちの家族を起こして一階へ。なぜかうちの家族は、揃いも揃って低血圧だ。低血圧って美形のステータスなんだろうか。まあそんな感じで家族起床。

「おはよー。父さん母さん。」

「ん。」

「おはよー。透ちゃん」

父さんと母さんに挨拶をすると、短いながらも返事が返ってきたので安心した。ひどいときは、寝ながらご飯食べるからね……この人達。

と、やうにひじるひじるて重みが…

「郁兄ー? 透は今日も可憐こいなあ。」

「んー? 透は今日も可愛こいなあ。」

「修兄ー! 郁兄じつにかしてー!」

「修兄ー! 郁兄じつにかしてー!」

これでよ…

「郁斗、離れる。俺の番だ。」

何を言つてゐるのだ。ここには。そこから意味不明な喧嘩をし始めた二人を無視して、『飯を食べて学校へ。

そして、なんやかんやで帰宅。私は剣道部なのでいつもは遅くなるのだけれど、その日は休みで早く帰ることができた、ホクホクした気持ちで帰ってきた。

いや。帰らうとした。いつもの道をたどつて最後の交差点にたどり着いたとき、それは起こつた。五歳くらいの男の子が、ボールを追つて道路に飛び出す。正確には、トラックの前へ。

あつーつと思つた時には体が動いていて、男の子を押し退けていた。田の前に迫るトラック。

周りの騒音。そのすべてがゆっくりに聞こえて、私は場違いに思つた。ああ…なんかこれが走馬灯つてやつかな?いや違うか。思い出しないし。じゃあなんて言つんだろ。これつて。

近づくトラックのライトが眩しくて田をぎゅっと瞑つた。最後に浮かんだ家族の顔にごめんねと囁いて、私の意識は真っ暗な闇に吸い込まれていった。

02 (前書き)

間違えがあったら指摘して貰えると嬉しいです。

暗く静かな闇の中で私は光を見ていた。その光の球体は、私の前に浮かんでいて、私はそれをただ見ていた。心の中で、早く立ち上がつて出口を探さないと、と考えていたけれど体が動かない。そして、置いてきてしまった家族のことを想つた。

父さんと母さんは今日帰つてくるの遅いよなあ。修兄と郁兄は、ご飯作れるのかなあ……確かに一人はなんでも出来るくせに料理だけは、下手だつたから今頃喧嘩してそうだ。みんなは朝起きられるかなあ。会社に遅刻したら大変なことになっちゃう。

早く帰らなきや。早く早く。そう思つたらようやく立ち上がる氣力が湧いてきた。よしつー！と氣合を入れて立ち上がつてみる。足は、地面で擦れて怪我をしているかと思つたけど無傷だった。まあ傷がないのにこしたことはない。このよくわからない空間から出なきや。

すると私の前でふわふわと浮かんでいた光る球体が、ゆっくりと動き始めた。まるでついてこいつて言つてているみたいだ。

まあ、何処にいけばいいか分からないからついていくことにした。真つ暗な闇の中を小さな光を頼り歩く。不思議と恐怖はなかった。そして、光が唐突に止まつた。

ここまで……いや……暗いままなんですけど。不審に思つて光に目をやると、言い訳がましく動いている。

……なんかやな予感がする。と思つた瞬間に光が弾けた。眩しくて目を瞑る。ああ、また意識を失うのか。さすがに一回目ならもうわかるぞ！

でもこれで出られるかもしね。早く家族に会いたいなあ。

立て続けに考える頭の中で、囁く声を最後に意識を手離す。確かに私は声を聞いた。

ごめんね。でも特典は沢山つけたから。そこらへんは安心してね。

つらいことじょうか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067z/>

きっとその瞬間に

2011年12月25日20時54分発行